

東洋史研究

第一卷
第一號

昭和十年十月發行

晉・趙の北方進展と山川の祭祀

序

森 鹿 三

北方より南下する低度文化民の勢力と抗争することは、黃河流域に定着せる農耕民族に擔はされた歴史的運命である。今、地域に於いては主として山西を採り、時代に於いてはほゞ春秋戰國期に限つて、此南北兩勢力の消長を考察するに、その現象は、ほゞ「晉・趙の北方進展」といふ結果になつてゐる。

山西省は周知の如く、北は外長城、東及び東南は太行山脈、西及び南は黃河を以て限られた高原である。而して北は綏遠省に、東は察哈爾、河北兩省に、東南より南にかけては河南省に、西は陝西省に隣接してゐる。長城は人工とはいへ、天險を利用したものであるから、山西省は全く「自然の境界」ナチュラール・バウンダリによつて區劃せられた、纏りのよい地域である。現在閩錫山が此地に於いて政治・經濟の統制を強行し得てゐるのは、この自然的地理的條件に負ふ所が尠くないと考へる。扱、この山西高原には北に大同盆地あり、中央に太原盆地あり、南に平陽及び蒲州平地あり、之等を中心にして、北・中・南の三區域に分つことが能る。民國の初には、この三區域を夫々雁門道、冀寧道、及び河東道と稱

した。之を前清末の區分で云へば、雁門道は大同・朔平・寧武の三府、忻州・代州・保徳の三直隸州に、冀寧道は太原・汾州・潞安・澤州の四府、遼州・沁州・平定の三直隸州に、河東道は平陽・蒲州の二府、解州・絳州・霍州・隰州の四直隸州に相當してゐる。遠く遡つて前漢の郡國制に依據して考へると、雁門道は雁門郡及び代・定襄兩郡の一部であり、冀寧道は太原・上黨兩郡であり、河東道は河東郡に當つてゐる。

—

山西の地を遺物遺跡の方面から觀察するに、蒲州平地の東北聞喜縣を中心とする地方、詳言せば、夏縣西陰村或は萬泉縣荊村等、涑水汾水流域の臺地緣邊部に於いて彩色土器を包含する新石器時代の遺跡が發見せられてゐる。彩色土器は、從來西は甘肅省より、河南を経て東は熱河^③に至る、地域に於いて發見せられて居り、中原文化の一標識と考へられてゐるから、夏縣・萬泉縣の地域は新石器時代に於いて中原文化圏内に在つたと稱することが能る。次に太原盆地の太谷縣、文水縣^④、太原縣^⑤に於いて發見せられた新石器時代の遺物中には中原文化の標識である彩色土器を含有してゐなかつた。太谷縣に於いては赤褐色の磨研土器が出土したが、文水縣の方ではそれすらなく、惟、骨器、石器であるから、聞喜縣地方より更に進んで太原盆地までもその文化圏内に在つたと言ひ得よう。中原文化の北限は更に北方にあるから——大同盆地に於いて中原文化の一標識である磨製石斧が發現する^⑥——太原地方の中原文化圏内に在ることは當然のことであらう。尙此の外に漢の上黨郡の地である長治縣に於いて磨石器文化の遺址が發見せられたといふ^⑦。北方の細石器に對する南方文化の標識である磨石器が、春秋中期まで赤狄の根據地であつたこの地に於いても發見せられたことは興味深い。他方常に南下の傾向を持つ北方の勢力が何處にまで及んでゐるかを見なければならな

い。勿論蒙古高原を主なるものとし、雁門道に於いても多くの遺跡を有してゐる。更に南下して太原盆地は如何といふに、前述の文水縣の遺址は或は北方系のそれではないかと思ふ。しかし確實な報告がないから不分明であるが、リサン師が太原府附近で採集したフタナイト製の皮剝フタナイト製の皮剝こそは北方文化の標識である細石器の一種であつて、北方勢力の南限が太原附近に在り得る事を明示してゐる。次に青銅器時代に於いても、北方系銅器が太原・太谷・平陽・汾陽介休・洪洞にまで及んでゐるのに對して、中原文化を代表する戰國式銅器が雁門關を越えた渾源④に於いて發見されてゐるのである。

遺物遺跡よりの考察は、全面的でない憾はあるが、上述の事實からだけでも、南北文化の交流・勢力の抗争を端的に察知するを得る。即ち北方の遊牧民が優勢になれば太原盆地は勿論のこと、更に南下して汾水下流の平陽平地にまでも達するのであり、黄河中原の農耕民も亦、内長城を超えて雁門道に入り、更に外長城以北にまでも勢を張ることがある。従つて山西全省はこの南北兩勢力の抗争地帯であると言ひ得る。而して春秋戰國期はまさに北方遊牧民が後退して、中原の勢力及び文化がこの地に擴充した時代に當るのである。

註① 西陰村は夏縣々城と聞喜縣城との中間、夏縣々城の北約二十五支里に在り。その發掘經過・遺跡・遺物に關しては李濟氏『西陰村史前的遺存』を參看せよ。

② 荊村は萬泉縣城の東北、稷山縣寄にあり。その遺跡に就いては董忠光氏「山西萬泉石器時代遺址發掘之經過」(『師大月刊』第三期所載)を參看せよ。

③ 之等の彩色土器の文化圏につき東は熱河と稱したが、舊奉天省錦西縣沙鍋屯鎮の遺跡は熱河朝陽縣と近接せる爲め、赤峰縣の遺跡をも含めてかりにかく稱したのである。

④ 太谷縣の方は廢河道の堤岸間に在り、文水縣の方は文峪水の西方、文水縣城の南十八支里、臺地縁邊の上賢村に在り。共に董忠光氏前掲論文參看。

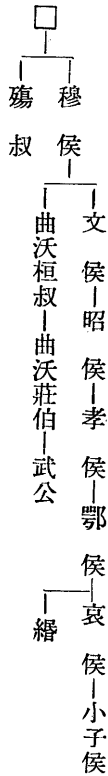
- ⑤ 汾水の西方、丁度陽曲縣(太原府)の對岸に當る。Kó leao keou とあるが如何なる字を充てるか判らぬ。恐らく太原縣境の地であらう。E. Licent, Les Collections Néolithiques du Musée Hoang ho Pai ho de Tien Tsin p. 46 參看。
- ⑥ 『考古圖編』第四・五輯參看。その採集地を大同縣大王村・小王村といふもその場所を確定しえぬ。又中原文化圏の北限とらふも、現在の知見に即しての言であるは勿論である。尙、北方細石器文化と南方磨石器文化との交錯地帯に關しては、水野江上兩氏の大作『內蒙古・長城地帯』第一編五五頁以下參看。
- ⑦ 水野清一氏談。
- ⑧ 水野・江上兩氏前掲書第二編二〇三頁參看。
- ⑨ 一九二三年、渾源縣西南十五支里の李峪村より出土した銅器群を意味する。その詳細については近く刊行せられる梅原末治氏の『戰國式銅器の研究』を參看せよ。

二

「古は冀州の域、虞は并州を分置す、夏は仍、冀州たり、周は并州と曰ふ、成王、叔虞を封じて唐國と爲す、後、晉國と改む」^①といふのが、晉の登場するまでの、常套的な山西省の建置沿革である。周の成王の弟、叔虞が封ぜられた「唐」とは何處であるか。『漢書地理志』太原郡晉陽縣の條には「故詩の唐國、周の成王、唐を滅して、弟叔虞を封ず」とあり、班固は晉陽即ち今の太原縣を以て周の唐國なりとしてゐる。鄭玄も亦、此説を踏襲してゐる。(『詩の唐譜參照』『括地志』^{史記晉世家正義所引}には故唐城に關して全く異つた二處を擧げてゐる。一は并州晉陽縣の北二里に在るもので、班固及び鄭玄の説に依據したものである。他は絳州翼城縣の西二十里に在るものである。此は恐らく司馬遷の説に淵源するものと考へられる。即ち『史記晉世家』に「唐は河汾の東に在り方百里」とあり、翼城は正に河汾二水の東に在るからである。又『左傳』昭公元年に「實沈を大夏に遷す」といひ、定公四年に「唐叔に命ずるに唐語を以てして、

夏虚に封ぜり」といふ。その大夏的位置に關して服虔は汾澮の間に在りと云ふに對して杜預は太原晉陽縣であるとする。前に見た班・馬の對峙は、左傳解釋上に於いては服・杜の對峙としてあらはれる。更に『漢書地理志』河東郡聞喜縣の條に「故曲沃、晉の成侯今本武公に作る晉陽より此に徙る」とある。鄭玄、亦之を襲うて「會孫成侯に至つて南徙し曲沃に居る」といふ。(唐譜參照)『史記晉世家』に據れば、唐叔の子燮が晉侯であり、その子寧族が武侯であり、その子服人が成侯であるから、成侯は正に唐叔の會孫である。『唐譜』には、その後穆侯に至り、絳に徙つたことを記してゐる。『地理志』河東郡絳縣の條には「晉の武公、曲沃より此に徙る」とあり、詩譜の記事と符合せぬ。前述の如き漢志と詩譜との全き一致より考へて、此の武公の二字、或は穆侯の誤に非るやを疑ふ。ともかく、班固・鄭玄によれば、唐叔虞は太原晉陽に封ぜられ、會孫成侯の時に遠く、南方曲沃に移つたと言ふのである。かゝる南下運動が何に起因するかは明らかに記述するものはない。司馬遷の如く、晉は初めから汾澮の間に都してゐたと考へるものは、移動の記事すらない。兩説の批判は暫く措き、晉國其後の形勢を觀察することにしよう。

穆侯以後の晉の世系は次の如くである。



昭侯の元年、文侯の弟桓叔を曲沃即ち今の聞喜縣に封じて以後、曲沃に蟠居するものは漸次勢を得、遂にその孫武公は侯緡を滅して晉君となり、諸侯に列せらるゝに至つた。史記には「曲沃の邑、翼よりも大なり、翼は晉君の都邑なり」と言ふ。翼は今の翼城縣であつて、先に司馬遷等が唐國の故地に擬定した處と一致する。従つて司馬遷等は晉の始封より侯緡の滅ぶに至るまで、その都邑は汾澮の間に在つたとするのである。武公の子獻公以後、惠公の新田に

遷るまでは絳に都した。^⑤ 新田は今の曲沃縣で、汾澮の間に在る。惠公の新田に遷るに際し、新田を改めて絳となし、故都の絳を故絳と稱した。地理志の絳縣は新田の絳であつて、故絳ではない。されば、「武公曲沃より絳に徙るといふ」班固の説は、嚴密に言へば正當ではない。

以上の如く春秋期、晉の國都は翼・曲沃・故絳・絳と、殆ど汾澮涑水を出ない、甚だ狹隘な區域であつた。

註① 『大清一統志』卷九十五。

② 晉國始封の地に關する二説の對峙は前清考據家にまで引繼がれてゐる。顧炎武（『日知錄』卷三十一「唐の條」）は頌として翼城説を堅持せるに對し、閻若璩（『潛邱劄記』卷三）は太原説を主張して顧説を破らんとしてゐる。全祖望（『經史問答』卷三）は「亭林の言も亦、自ら故あり」と言ひつゝも、翼城説の難點一二を指摘して太原説に傾いてゐる。又、同じく太原説の中でも成侯の南下運動に關しては閻全二氏の説は分岐する。註④參照。

③ 此のみではなく、『漢書地理志』右扶風棗邑の本註に「詩國」とあるに對して、鄭玄の『詩譜』に「國者今屬右扶風棗邑」とあるが如き、或は鄭風の譜に地理志の文を引くが如く、兩者の一致は諸處に見出すことが能る。

④ 司馬遷の説を繼ぐ顧炎武にはこの南下運動は當然無視さるべきものであらう。太原・翼城間七百支里に達する南下運動の荒唐さの故にこそ、却つて顧氏は翼城説を頑強に主張するのであらう。抑、太原説の閻氏は詩譜に言ふ成侯の南遷を無條件に認め、「晉の始めて唐に封ぜられた時は方百里であつたのが、曾孫成侯に至つてその疆域は五倍以上になつた、王綱が振はず、覇者が小國を兼并することは、何も春秋時代に入つてからの事ではなく、既に此時——宗周——に現れてゐるのである、懼れずに行られようか」と言つてゐる。是に由ると閻氏はこの南下運動を以て、太原の晉氏が王畿の地を侵害したものと解してゐるやうである。さすがに全氏は一舉七百里の南下運動には困惑したか「晉は唐叔以後、靖侯以前の年数が判らぬと史記に言つてゐる。年數すら不明であるのだから、他のことは言はずもがな、さすれば此の不明の期間に漸次南遷して翼城に到達したことは必定である」と言ふ。相當勝手な言分であるが、對立せる史記と詩譜の相反せる兩説を併用したのであるから當然の混亂である。

⑤ 武公の都に關しては『史記晉世家』に「始都晉國」とあり、從來の封地・曲沃を新に晉國の都としたとするか、或は従前の

晉國都であつた翼に都したのか二説がある。顧炎武『日知錄』卷三十一、晉都の條）や閻若璩『潛邱劄記』卷三）が前者である外は、大略後者を支持する。次に獻公に關しては、同じく『史記』に「衆を城いて故晉の羣公子を處らしめ、命じて絳と言ひ、始めて絳に都す」とある。「始めて」と言ふ限り、從來の翼・曲沃とは別の處に求めねばならぬ。顧・閻兩氏は汾水の右岸汾城縣の南新絳縣の北——趙康鎮の邊か——に擬定してゐる。顧氏は汾城縣の南二十五里に城址の尙存せるを言ひ、閻氏も亦「余親しく其地を歴るに、遺址宛然たり、方めて従前の説の盡く錯れるを悟れり」と自信ある言葉づきである。顧閻兩氏を除けば他は殆んど絳即翼説である。かくの如く宗周期の晉の國都に關して對峙した顧・閻兩氏は春秋期の晉都論では全く一致してゐるのは興味ある現象である。

三

次に晉國の疆域を考へるに、武公の頃はまだ國都附近の地を領有したに過ぎぬが、その子獻公に至つて漸く廣大となつたのである。その十六年（西紀前六六一）には霍（今の霍縣）耿（今の河津縣）魏（今の芮城縣）を滅し、その翌年には東山臯落氏（今の垣曲縣）を滅し、その二十二年（西紀前六五五）には虞（今の平陸縣）を滅し、ほど河東道の地は晉の領有する所となつたのである。このことは前章に於いて考察した國都の位置並にその移動に照らしても當然のことであらう。従つて春秋期以前の晉が太原に都してゐたといふは決して合理的な解釋とはいへぬと考へらる。而してこの國境の北及び東即ち太原と上黨は所謂赤狄・白狄の占居する所であつたのである。従つて春秋期の晉戰國期の趙の歴史的使命は之等の狄族を經略して、秦漢郡縣制の基礎工事をなすことであつた。今、晉の狄を滅する次第をみるに、晉景公六年（西紀前五九四）には潞氏（今の潞城縣）を滅し、同七年（同五九三）には留氏（今の屯留縣）を滅し、同十二年（同五八八）には庸谷如を滅して、上黨の狄族を掃滅し、昭公十七年（同五四一）には無終及び羣狄を大鹵（太原）に滅し、太原は晉の有となつたのである。晉の疆域が河東道より冀寧道にまで進展するに、約百年の歲月を

費してゐる。尤も晉國の軍事的政治的工事は必ずしも北方へのみ關心を持つてゐたのではなく、西方陝西へも、南方河南へも、東方河北へも経略の歩武は進められてゐたのである。例へば『史記晉世家』に、獻公二十五年（西紀前六五二）の晉疆を西は河西を有つて秦と接を接し、東は河内に至ると稱してゐることによつて、その疆域が東西共に既に山西省境を越えてゐることを知る。次に冀寧道より雁門道へは如何に進展したであらうか。晉一代に於いては冀寧道より東方に轉じ、太行山脈の東に在る肥・鼓の如き白狄種を攻伐し、北方雁門道へは向はなかつた。その間、晉は衰微し、六卿が權勢を張るに至つた。然し、この事業は三晉の一である趙によつて繼承せられた。

當時雁門關北に勢力を有したのは代國である。その本據は今の察哈爾蔚縣に當る。『呂氏春秋』長攻篇に「代の俗を望むにその樂しみ甚だ美なり」といひ、「代君色を好む」とあり、同書先識篇に代の東南に隣する中山の俗を記して「晝を以て夜と爲し、夜を以て日に繼ぎ、男女切に倚り、固より休息すること無し、康樂・歌謠悲しきを好む」と言ふのと相類してゐる。中山は春秋の鮮虞であり、白狄の別種と稱せられる。代・中山共に西北方より齎される新奇な文化・藝術を享受するには至便の位置に居る。従つて中原よりは戎狄と言ふが、「其樂甚美」なる狀況であつた。鮮虞―中山が春秋・戰國を通じて著明な存在であるに對して、その西北に隣し、略同種族と看做される代國が春秋及び三傳にその名を留めず、しかも戰國期に入るや否や、晉の後を繼いだ趙氏に滅されて了つたのである、その史上に現れた時は、即ち滅亡の時であつたのである。『史記趙世家』に據つて趙・代交渉史を辿らう。趙簡子が嘗て數日睡つて醒めず、その時の夢を後に道に當る者に話すことから始まる。簡子曰ふ「吾、兒の帝の側に在るを見る、帝、我に一翟犬を屬して曰く、汝の子の長ずるに及んで賜はんと、かの兒何故に翟犬を賜ふや」と、道に當る者曰ふ「兒は主君の子なり、翟犬は代の先なり、^①主君の子まさに必ず代を有たん云々」と。趙が將來代國を兼併することを此に豫言してゐる。その後、簡子が盡く諸子を召して與に語るに、毋郵が最も聰明であつた。簡子がそこで諸子に告げて曰ふ「吾、

寶符を恆山の上に藏せり、先に得し者は賞せん」と、諸子馳せて恆山の上に行く、求めて得る所無し、毋卹還りて曰ふ「既に符を得たり」と、簡子曰ふ「告げよ」と、毋卹曰ふ「恆山の上より代を臨む、代取るべし」と、簡子は毋卹の果して賢なるを知り、太子伯魯を廢して毋卹を太子とした。やがて簡子卒し、毋卹が立つた。是即ち襄子である。簡子を葬るや、襄子は未だ喪服を釋かぬに、早くも代國攻伐の計畫を爲したのである。即ち夏屋山―雁門山の東嶺―に登つて、代王を請じ、厨人をして銅料を操つて、代王及びその從者に食はしめ、斟―酌なり―を行ふ時、陰かに宰人をして各々料を以て代王及び從官を擊殺せしめ、遂に兵を興して代地を討平したのである。是より先、代王に嫁して居た襄子の姉は之を聞き泣いて天に呼び、笄を磨して自殺した。襄子は廢太子伯魯の子周を、代に封じて代成君とした。その後武靈王の子恵文王の三年に至つて始めて白狄種の中山を殲滅するに至り、大行山脈の東麓に沿うて代に至る交通路が安全便宜となり、代地は完全に中原文化圏内に入つたのである。然し他方、かゝる状態に適合せんが爲め中原文化自身の變質が徐々に形成されて行つた。騎馬・胡服の如きはその顯著な例であらう。

尋いで趙が秦に滅さるゝや、趙の亡大夫等は悼襄王の適子嘉を立て、代王としたが立つこと六年にして、秦に破られた。かくて秦は此地にも郡縣制を布いたのである。

註① 單なる比喩以上に、代の始祖傳説乃至は開國傳説として宛かも西南夷に於ける盤瓠傳説の如きものがあつたのではなからうか。「穆天子傳」卷一に、今の桑乾河の上流地方に犬戎がゐて、穆天子に觴したことを記してゐる。その犬戎の始祖傳説として『山海經大荒北經』には次の如く述べてゐる。「融父の山に人あり、名づけて犬戎と曰ふ、黃帝苗龍を生む、苗龍融吾を生む、融吾弄明を生む、弄明白犬を生む、是犬戎たり、肉食す云々」とあり、犬戎のもと白犬なるを言ふ。且、此に問題とせる代も犬戎と略々同じ地方に占居すれば、少からぬ關係を有するやうである。代の東南に位置する中山は白狄の別種といふ、犬戎のもと白犬なりと言ふと相照應すべきであらう。

四

古代支那に於いては天子が天地を祭るに對して、諸侯はその封域内の山川を奉祀する。魯や齊が泰山を祭り、(『論語八佾』『禮記禮器』參照) 楚が江・漢・睢・漳を望祭する(『左傳』哀六年參看) が如き是である。山川と言つてもすべての山川が祭られるのではなくて、小數の神聖性を有すると考へられるものに限定されてゐる。諸侯より崇祀される山川とは、一は從來から傳統的に神聖視されてゐるものであり、他は臨時に山川の神が自ら諸侯その他の政權者に啓示を與へて、その祭祀を執行せしめるものである。この二種は本質的には差異がないと考へ得るかも知れぬ。例へば後者の如くして發生した祭祀も漸次恆例となつて前者の如き性質を具有するに至るであらう。従つて前者も發生的には後者の如き手續を執つたのであり、兩者の差は單に時間の先後から由來したものであるとも考へられる。然し後者の如き過程を経ざる信仰も存することであり、一時期の斷面に於いては、この二者が共存してゐるのであるから兩者の區別を想定することは許されるであらう。歴史上に於いては前者よりも後者が強烈な印象を與へてゐるのは當然のことであり、従つて此で取扱ふ晉・趙に於ける山川の祭祀に在つても、後者の啓示が華麗な役割を演じてゐる。

晉の平侯が疾んだ時、鄭國は子産を晉に遣した。平公が「トして曰く實沈・臺駘の祟を爲すと、史官知るなし、敢て問ふ」と曰うたに對して、時の「博物君子」である子産は實沈は參神であり、臺駘は汾洮の神であることを微細に物語り、且、山川の神は水旱の時に、日月星辰の神は雪霜風雨が不順の時に祭るべきなることを述べ、決して實沈臺駘の祟ではなく、君の疾の如きは飲食・哀樂・女色より生じたものだと言破してゐる。^① 汾は勿論汾水であり、洮は涑水である。この二水の流域地方には嘗て臺駘の後である沈・姒・葦・黃の四國が居たのであるが、晉はこの四國を滅して、汾川を主祭するに至つたのである。その爲め、いはゞ地主神である臺駘が晉侯に祟つて、祭禮の執行を強要し

たのであらう。祟は『説文』に神禍なりとある。鬼神の冒瀆より惹起されるものであらうが、文字の構成より觀て、「神靈の出現」といふ意であらう。神禍なりとのみは言ひきれない。自然・人體の災害は神の示現する最も一般的な方式である爲めに、結果より考へて祟即ち神禍としたのであらうが、原義は單に「神靈の出現」と解すべきであらう。又、トと史とはその管掌を異にし、トは神人の間に在つて神意を人に傳へるものであるに對して、史はその幽玄な神意を解^{インクエアレイト}釋するものである。かゝる意味から、鄭の子産こそは當時に於ける最も偉大なる「史」であつたと共に、既にその知識は近世的であり、批判的であり、當時の「史」の觀念とは異つた段階に達してゐる。

次に晉の獻公十六年、霍を伐つた時、霍公は齊に奔つた。晉は大いに早つた。之をトふと、是も亦、前と同じく地主神である、霍太山が祟を爲してゐるといふ。その災害を除く爲め晉侯は霍君を齊より召還して霍太山の祀を奉ぜしめるやうにした。そこで晉はもとの如く豊穰の秋を迎へたのである。^②その後、戰國期に入つても霍太山神は活躍し、趙氏の發展を豫約してゐるのである。趙襄子の臣原過が王澤に於いて三神より竹書を得たが、その中には、三月丙戌の日に、余は汝をして智氏を滅せしめんとすと言ひ、又余を百邑の主たらしめば、汝に林胡の地を與へんとも言つてゐる。趙は是より先、前章に述べた如く北は代を有ち、今又この豫言を得て南、智氏を併せ、韓魏よりも強大になつた。そこで三神を百邑に祠り、原過をして霍太山の祠祀を主らしめた。^③

かくの如き祟を爲して奉祀を喚起するものの外、傳統的に神聖視されてゐる山川としては、南に梁山あり、北に漳沱河がある。即ち『爾雅釋山』に「梁山は晉の望なり」とあり、『禮記禮記』に「晉人將に河に事あらんとすれば、必ず先づ惡池に事あり」と言ふのがそれである。有事とは疏にいふ如く祭の意である。惡池は漳沱である。かの『秦詛楚文』に見ゆる亞駝の神も亦、漳沱である。晉の奉祀した山川には黄河、梁山、涑水、汾水、霍太山、漳沱河を數へることが能る。この系列は晉の勢力が山西省の西南隅より發し、汾水流域に沿うて東北に進み、更に漳沱河の流域にま

で到達した経過、即ち河東道より冀寧道への發展と相照應するものである。趙はその郷土（即ち趙城縣）の守護神、霍太山山陽侯の厚き加護を蒙つて、晉の平狄事業を繼承し、代及び中山を滅し、雁門關北の地に中原文化を擴充したのである。しからば霸王の象徴たる疆内山川の奉祀は、この關北の地に於いても行はれたであらうか。文獻上に於いては之を求め得ないが、幸にして遺跡遺物上から立證するを得るのである。即ち第一章に於いて言及した渾源出土の銅器群こそは、その出土の地域、遺物の性質及び時代性より觀て、山川崇祀が行はれたことを明示してゐる。この地は漢の雁門郡崞縣に當り、後魏では崞山縣といひ、唐末五代の頃より渾源縣と稱するに至つたのである。崞クワなる稱呼よりしても、想像し得る如く、此地は北には大同盆地との間に襄山が介在し、南には恆山が横つてゐ、東には廣靈縣との間に壺流河と渾河との分水嶺が存し、全く山々を繞らした地域である。渾河はこの谿谷を西方に向ひ、所謂崞口クワコウを出で應縣に至つて桑乾河に入るのである。八水渾流するが故に渾河の名があるといふ。縣名は亦、この渾河の源に位置するが爲めに渾源と稱するのである。西流する渾河の外、南流する溇沱河、東南流する滹沱河、東北流する壺流河の源も亦、この渾源の附近に求めることが能る。されば此地の有つ神聖性は鴨綠・圖們・松花三江の發源する長白山に類似するものがある。百山の集り、百川の發する渾源こそは、趙氏が豪華なる山川の祭祀を行ふに適應した地域なのである。

註① 『左傳』昭公元年及び『史記鄭世家』參看。

②③ 『史記趙世家』參看。

④ 渾源出土の遺物等に關しては梅原末治氏『戰國式銅器の研究』參看。

⑤ 『水經灤水注』（王先謙合校本卷十三・四葉左）參看。